

常設展 〈2024 年 4 月－6 月〉 作家・作品解説

小倉遊亀コーナー

小倉遊亀とその弟子たち

Ogura Yuki and Her Disciples

ほりかわ きみこ
堀川 公子

兵庫県神戸市に生まれる。生後間もなく東京に移転。横浜の捜真女学校に進学し、同校で教師を勤めていた小倉遊亀に出会い絵を学ぶ。1935 年（昭和 10）、日本女子大学家政学部に進学。大学在学中に安田靫彦に師事し、卒業後の 1941 年（昭和 16）、再興第 28 回院展に初入選（当時の氏名は高山公子）し、1943 年（昭和 18）院友に推挙される。その後、結婚を期に活動を中断するが、小倉遊亀との再会をきっかけに 1952 年（昭和 27）の再興第 27 回院展から再び出品。以降は連続入選を重ね、1959 年（昭和 34）の再興第 44 回院展では日本美術院賞を受賞。1961 年（昭和 36）特待に推挙された。

せんきゅうひやくごじゅうきゅうねんなつのおもいで
1 一九五九年夏の思い出

ざすおんぞう
6 座主御像

金箔を貼った屏風が置かれた室内に、年配の僧侶と少年僧が対面し座っています。二人の間には、台に置かれたみずみずしい紫陽花^{あじさい}の切花。少し離れた場所には、ほっそりとした形状の瓶^{へい}（水などを入れるための器）が配され、花木とさまざまな器を取り合わせて描いた、師の小倉遊亀の静物画を思わせます。座主とは一般的に、仏教の天台宗の寺院における最上席の役職の名称であり、特定の寺院にのみ置かれているものです。本作は、再興第 66 回院展に出品されました。

ますい みえこ
益井 三重子

広島県呉市に生まれる。広島県立呉高等女学校在学中に日本画を学び始め、1928 年（昭

和 3) 広島県美術展に初入選を果たす。1932 年(昭和 7)に結婚し、夫の赴任先である京都府舞鶴へ同行。同地から京都市内の三谷十糸子^{みたにとしこ}の元を度々訪れ指導を受けた。再び夫の勤務の関係で神奈川県大磯に移り、1947 年(昭和 22)頃からは安田靫彦、小倉遊亀に師事し、1951 年(昭和 26)には再興第 36 回院展に初入選。以降も入選を重ね、1953 年(昭和 28)院友に推挙、1971 年(昭和 46)には特待に推挙された。

2 ^{にわで}庭で

茶色い子犬を胸元に抱いた着物姿の女性が、庭先の椅子に腰掛けています。実はこの女性、作者の師匠である小倉遊亀その人です。遊亀は大変な犬好きだったので、随筆にもしばしば愛犬の話題が登場します。本作でも、子犬を両手で包み込むようにして抱き上げる様子から、小さな生き物に対する暖かな愛情が感じ取れます。なお描かれている籐の椅子は、遊亀の《娘》(1951 年、当館蔵)(参考図版参照)にも登場します。再興第 61 回院展出品作。

^{おおふく たけこ}大福 唯桂子

広島県に生まれる。1951 年(昭和 26)、京都市立美術専門学校(現在の京都市立芸術大学)日本画科を卒業。小倉遊亀に師事し、再興第 44 回院展に初入選。以降入選を重ね、1962 年(昭和 37)院友に推挙され、後に特待。人物表現を得意とした。

3 ^{うちのせんせい}うちの先生

メガネを外し、コンパクトを手にしながら身支度を整える《うちの先生》こと、小倉遊亀が本作のモデルです。親しみと尊敬を感じさせるユーモラスなタイトルからは、師弟の交流の深さが垣間見えます。画面には、戸棚に飾られたさまざまな器や、花瓶に生けられた大ぶりの花菖蒲など、遊亀の作品に度々登場するモチーフが画家を取り囲むように描かれています。

^{はらだ みちえ}原田 美智恵

大阪府に生まれる。1919 年(大正 8)木谷千種^{きたにちぐさ}に入門し千里^{ちさと}という号を与えられる。1922 年(大正 11)、1925 年(大正 14)に帝展入選。1931 年(昭和 6)には千里の号を千種に返

納して土田麦僊つちたばくせんに師事し、以降、本名の美智恵を名乗る。1936年（昭和11）の再興第23回院展に初入選を果たすと1941年（昭和16）には安田靫彦に師事、翌年に院友に推挙された。その後も入選を重ね、1981年（昭和56）には特待に推挙。後年、小倉遊亀の門下となった。

4 花かげはなかげ

赤い毛せんの上に座った女性が、茶道のお手前を行なっています。状況から推察すると、屋外でお茶を楽しむ野点のだての最中かもしれません。金箔を貼り込んだ背景には、遠くに山並みが描かれますが、陰影はつけず緑一色で塗りつぶし、遠近感を感じさせません。このように平面的な表現は、伝統的な日本の絵画によく使われるものですが、一方、赤い色が印象的な毛せんを大胆に画面の左下に寄せることで、面白いバランスの構図の組み立てに成功しています。

松室 加世子まつむろ かよこ

群馬県に生まれる。1958年（昭和33）、東京藝術大学美術専攻科（日本画）卒業。安田靫彦に師事し、1959年（昭和34）再興第42回院展に初入選。入選を重ね、1975年（昭和50）の再興第60回院展、翌年の再興第61回院展では奨励賞を受賞した。1963年（昭和38）に院友に推挙され、のち特待に推挙された。作品の主題には、歴史上の人物を取り上げることが多い。

5 潮音—平家物語よりちょうおん へいけものがたりより

平家物語は、平安時代末期に勢力を伸ばした平家が栄え、滅びゆく様を描いた歴史物語です。本作は物語終盤、壇ノ浦だんのうら（現在の山口県）の海上で平家が滅亡を迎える場面。中央の幼い子供は安徳天皇、後ろに付き従うのは従者の按察使局伊勢あぜちのつぼねいせ、尼僧の姿で手を合わせるのは祖母の平時子たいらのときこでしょうか。追い詰められ、今まさに海に身を投げようとする一行の表情は、これから訪れる悲劇的な結末を静かに物語ります。本作は、再興第64回院展に出品されました。

こいち みちこ
小市 美智子

神奈川県に生まれる。安田鞞彦、小倉遊亀に師事し、1950年（昭和25）、再興第37回院展の初入選作品が奨励賞を受賞。以降入選を重ね、1955年（昭和30）院友に推挙。1968年（昭和43）には特待に推挙された。

よこはまかいこ
7 横浜回顧

金箔の背景に、きらびやかな衣装の女性2人が描かれます。椅子に座り、開化絵^{かいかえ}あるいは横浜絵^{よこはまえ}と呼ばれる、異国風俗を紹介する浮世絵を手にする女性は西洋のドレス姿、その隣に立ち、やや後ろを振り返るポーズを取るのは日本の着物姿の女性です。タイトルにある横浜は、幕末以来、諸外国への窓口となった港町。この女性たちの姿は、東西の文化が交流し、華やかな発展を遂げた横浜の街そのものを表しているようにも見えます。再興第67回院展に出品されました。

さわだ いく
澤田 育

石川県に生まれる。1931年（昭和6）、神奈川県女子師範学校（現在の横浜国立大学）二部を卒業。安田鞞彦、小倉遊亀に師事し、1943年（昭和18）の再興第30回院展に初入選。花や動物を作品の主テーマとし、入選を重ねた。1950年（昭和25）に院友に推挙、1973年（昭和48年）には特待に推挙された。

おけしょう
8 お化粧

おしゃれをするのは、何も人間に限ったことではありません。本作では、犬や猫のトリミングの場面が主題です。3人の女性がお揃いの白いユニフォームを着ていることから、ここはペットサロンのような施設であることが分かります。ドライヤーを当てられたり、毛並みを整えられたり、犬や猫が人間顔負けに身だしなみを整えられていく様子は、まさに作品タイトルのおおりに《お化粧》です。再興第67回院展に出品されました。

かんだ みちえ
神田 三千枝

広島県に生まれる。安田鞞彦、小倉遊亀に師事。1949年（昭和24）、再興第34回院展に

初入選し、1951年（昭和26）に院友に推挙。その後も入選を重ね、1969年（昭和44）には特待に推挙された。

9 りっしゅう 立秋

立秋とは、二十四節気(中国の古来からの考え方で1年間を24区分に分けた季節の名称)のうちの一つ。現在のカレンダーではおおよそ8月の上旬にあたり、秋の気配が立ち始める頃とされます。画面には、浴衣姿で籐の椅子に座った2人の女性が描かれます。向かって左側の女性が手にしているススキには、そろそろ若い穂が出始めており、ひと足早い秋の訪れを感じさせます。再興第69回院展出品作。

よこみぞ ゆき 横溝 由貴

東京都に生まれる。共立女子職業学校（現在の共立女子大学）を卒業し、安田鞞彦、小倉遊亀に師事。1953年（昭和28）、再興第38回院展に初入選。以降入選を重ね、1957年（昭和32）院友に推挙され、後に特待。人物と風景を得意とした。

10 れすとらん うら レストラン裏

ヨーロッパと推測される、異国のレストランの裏口です。白いエプロンを腰に巻き、布で頭髪を束ねている女性は、このレストランで働いているのでしょうか。パンを手にした少女が寄り添うように女性の隣に佇みます。足元の階段と道路には猫が2匹描かれ、画面のアクセントになっています。

おぐら ゆき 小倉 遊亀

滋賀県大津市生まれ。旧姓溝上。遊亀は本名。県立大津高等女学校卒業後、1913（大正2）年奈良女子高等師範学校（現、奈良女子大学）国語漢文部に入学、専修科目は図画。図画と日本史の教授から、古美術の鑑賞や、同時代の文展受賞作に触れる機会を与えられました。卒業後は京都、名古屋、横浜で教鞭を執ります。1920（大正9）年安田鞞彦に入門。1926（大正15）年第13回院展に《胡瓜》（所在不明）が初入選。以後連続入選し、1932（昭和7）年推挙されて女性初の同人となります。禅の精神修養を重ね、1938（昭和13）年山岡鉄

舟の高弟小倉鉄樹と結婚。家族や子供、または裸婦を含めた人物画、そして静物画をよくしました。上村松園賞、毎日美術賞、日本芸術院賞を受けます。1980（昭和 55）年、文化勲章受賞。饒舌に過ぎずに対象の本質を捉えようとする理知的な造形が魅力です。構想や概念で推すのではなく個々の持つぬくもりを感じさせる独自の視点を確立しました。1990（平成 2）年に女性初の日本美術院理事長に就任。

11 むすめ 娘

浴衣の令嬢が足を高々と組んで籐椅子にかけける奔放な姿から、遊亀が現代女性を批判的に観察していることがわかります。本作の 2 年後に再び現代女性を描いて、「石でも木でも人間でも同じである」と、対象を客観的に観察する大切さに思い至るまでの、過渡期の作品とも捉えられます。俵屋宗達が形に対して持っている敏感な感覚や鋭い目に、遊亀は学んでいます。遊亀が対象との距離を徹底してゆく背景には、この学びの成果があると言えます。「真実なものだけがもつ強い美しさ」を遊亀が描けるようになっていく過程にある作品です。

12 はなさんだい 花三題

13 がじんぞう 画人像

これまでの人物画では一番大事な顔が描けていなかったという反省の気持ちで、自画像に取り組みました。鏡を見て描いているため、着物の襟が左前で、左手に鉛筆を持っています。室内に差し込んだ光によって、顔の陰影をつけ、麻の着物や部屋の青色の彩色をプラチナ地の上で変化させるなど、立体物を平面に描き出すための工夫がなされています。奥に床の間のような構造が見えており、それとは異なる視点から捉えた天井の隅を表すような直線も描き込まれているのは、鏡を通して見ているためもあろうが、ピカソの影響を指摘できます。「私の顔は拙い顔だが或るものありそうに思える。（中略）削り削り、うんと省略してしまいたいのだが、「私」がぬけてゆく。とてもむつかしくていい勉強になった」と述べているが、描きたい「或るもの」を捉えて、私という具体的でリアルなものに反映させようとした、堂々とした肖像画です。